

墨川亭雪麿 『傾城三国志』 翻刻（三） -第二編上帙-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2017-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18430

墨川亨雪磨 『傾城三國志』 翻刻（三）——第二編上帙——

神田 正行

凡例

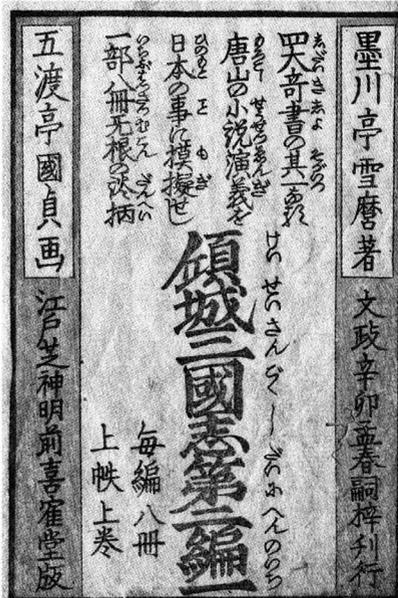
- 一、仮名は一部を除いて、現行のひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。
- 一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名は、一部を除き省略した。
- 一、原本との対照を容易にするため、合印（あいしりし）文章を読む順序を示した記号）をも翻刻するが、多くは形の近い記号で代用した。
- 一、本文には、内容にもとづいて適宜段落を設けた。また、「巻（五丁の単位）」ごとに改段を行った。
- 一、見開きが改まる位置には、「（4ウ・5オ）」の形で丁数を示した。
- 一、各人物が初めて、もしくは久々に登場する場面では、原作『通俗三國志』の相当する人物を【】内に注記した。また一部の地名や事物についても、同様の処置を行なった。「▼」印以下は、稿者による注記である。
- 一、影印ならびに翻刻の底本には、早印本と思われる明治大学図書館（江戸文芸文庫）蔵本を用いた。

《第一冊 表紙》



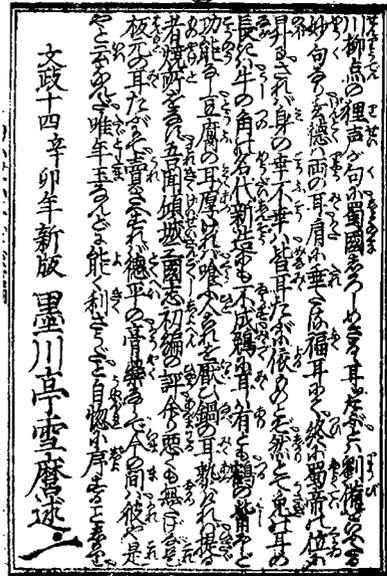
傾城三国志^{けいせいさんこくし}二編^{にへん} 喜鶴堂梓
 雪麿作 国貞画 上帙卷上
 辛卯新刊 何進[◆]駒絵内。中央は本作の香取

《第一冊 前表紙見返し》



墨川亭雪麿著 文政辛卯孟春嗣梓刊行
 四大奇書の其一なる
 唐土の小説演義を
 日本に摸擬せし
 一部八冊无根の談柄 每編八冊上帙上卷
 五渡亭国貞画 江戸芝神明前喜鶴堂版

《二丁表 自序》



(巻)

川柳点の狸声が句に、蜀国しろしめさるゝ耳ツたぶ、
 とは劉備をいふたる妙句なり。玄德は両の耳、肩に垂た
 る福耳にて、終に蜀帝の位に昇る。されば身の幸不幸は、
 皆耳たぶに依ものとぞ。然とて兎の耳の長きは、牛の角
 の名代新造にも不成、鵜に耳は有とも、鶴の背ほど功能
 なし。豆腐の耳厚ければ、喰ふ人これを厭ひ 鍋の耳熟
 ければ、提る者焼所をなす。吾聞傾城三国志初編の評、

余り悪くも無たげな。是板元の耳たぶにて、売さへすれ
 ば徳平の、膏薬ならで今の間は、彼や是やと云なんだ。唯
 年玉などに能く利さうだ、と自惚に序することしかり。

文政十四辛卯年新版 墨川亭雪麿述

《注》

○蜀国↓この川柳は、『柳多留』第五十四篇（文化八
 年刊）に見える。

○徳平の膏薬↓四壁庵茂蕙の『わすれのこり』に、「徳
 平が膏薬」の項があり、以下のように記す。

小さき挾箱様の物に、会符のごとく、「奥州仙台
 岩沼徳平」としるし、「奥州仙台岩沼の徳平が膏
 薬は、あれやこれやにやかかなんで、あか切れな
 んぞにやよくきくぞうだ。」と云ひて売ありく。

（統燕石十種第二巻。昭和55年、中央公論社）

右序文は、傍線部のような売り文句を踏まえている。

「年玉」は、草双紙が年始に売り出され、年玉代わり
 にも使われたことをいう。

《二丁裏・二丁表》



十婦人の一個譏業【張護】

敏行子敏貴【何貴人】

▼駒絵内「何貴人」。

敏行妻香取【何進】

▼駒絵内「何進」。

御靈媛御女弁姫【劉弁（少帝）】

《二丁裏・三丁表》



純友母堅田【孫堅】

勇婦初糸【袁紹、字本初】

▼駒絵内「袁紹」。

壬生忠峯女遠郷

▼18丁裏に登場。『通俗三國志』には、相当する人物が見えない。登場位置から推すと、董卓に関する「前將軍察郷侯」という記述を、人名と読み誤ったのかも知れない。

貫之妻橋立【橋瑁】

▼駒絵内「橋瑁」。

《三丁裏・四丁表》



友則女篠原【丁原】

▼駒絵内「丁原」。

右中弁希世【董国舅】

希世妻磐梨【董皇后】

躬恒妻筐【王匡】

▼駒絵内「王匡」。



(4ウ・5オ 十婦人 秋雨を阻む)

読みはじめさる程に御霊姫【靈帝】の、おん傍らに控へたる、十婦人【十常侍】のともがらは、涙を流しもろ共に、姫が御前に出でて言ふやう、「いかなる事によりてやらん、我がともがらを憎むの故もて、賢しらごとを聞えあげ、身を罪なはし給ふと覚えぬ。願ふは命助かりて、おのれくが故郷に帰り、司位もうち捨て、身をのみまう侍りなば、喜びこれにますことなし」と、うち嘆きかこつにぞ、姫上聞こし召すよりも、にはかに御気色変はりつ、「やをれ秋雨【劉陶】いかでかく、此女房らを憎むぞや。我御料が家にもそば近く、召し使ふ腰元どもの、なきことは▲／▲あらじかし。妾にも又、内侍司なからずやは」と息巻き荒く、御傍らをかへり見給ひ、「誰かある」と宣へば、「あつ」といらへて上童、姫の御前にかしこめば、「瀧口召して秋雨が、頭を刎ねよ」と宣ふに、秋雨いたく悲しみて、「妾が命は惜しからねど、いと惜しきはかく栄へ給ふ、東の御殿も今日よりして、たちまち滅び失せ給はん」と、言ひつゝ、外の方へ引かれ出づ。

かゝる折から、東屋あづまや【陳耽】といへる女房、これも臨時のご機嫌伺ひ、御所へ参りあはせしが、秋雨たゞ今、斬らるゝといふよしを、聞くと等しく走り参りて、まづこれをおし止め、さて姫上の御前みまへに出で、「秋雨ことはいかなる罪を、犯してこれを斬らしめ給ふ」と、うかゞふにぞ御霊姫、「さればとよ秋雨ことは、みだりに十婦人のともがらを、賢まかしらして妾に告ぐ。妾そのことのことならぬを、よく悟り得たる也。この故をもて秋雨を、



(5ウ 秋雨・東屋、秘かに斬られる)

殺して後に讒言の、次へ(4ウ・5オ)／続き道を絶んと思ふなり」と、聞きもあへず東屋が、「今天あまが下にありとある者、かの十婦人らをいたく憎みて、常に彼らが肉を食らひて、○／○立ちたる腹をいやさんと、願ふことしきり也。しかるを姫上此ことを、いさゝかも察し給はで、彼らを敬かたじけなくひ給ふこと、父母のごとくし給ふ、これ何のことわりぞや。かの女房らが身に取りて、一一の巻へ

(5ウ)

(二)

吾の巻よりつゆばかりも功いさなふして、皆重く傳やづかれぬ。中にも封皮ふうし【封謂】・段橋だんばし【段桂】らは、黄巾の賊婦らに、秘かに賂まいたを受けおきて、内応せんとはかりし者なり。姫上早く彼らそば、罪にあて給はずは、禍わざはひ目の当たりにあらん」と、言ふに御霊姫直はく、「封皮・段橋賊婦らと、内応のことはみな、跡形もなき空言そらごとなり。いかにぞや、十婦人の内において、一人か二人、忠義を思ふ者



（6才 堅田、走井に取り入る）

なからんや。おことみだりに賢まかしらして、彼らをそこなふ心にや」と、怒いかじ給ふを東屋は、二度三度諫たひむるを、御霊姫は怒りに堪へず、館の内より引出さしめ、秋雨ともろ共に、獄舎びとやに厳しく繋ながれける。しかるに十婦人のともがらが、その夜秘かに武士を遣はし、**上へ**／＼**下より**二人の女房を殺させけるは、無残といふも余りあり。

こゝにまた伊与の大掾おとぎ、純友【孫夫人】の母の堅田**【孫堅】**は、かの十婦人の内なりける、走井**【趙忠】**が使ひをさしこし、にはかに己を尾張の国、赤松といふ所の、司つかさにぞなしければ、やがてその所に至り、日を経て謀反の賊婦らを、悉く滅ぼしけるにぞ、此ことを御殿へ申し、走井に告げしかば、再び恩賞せられける。

伊勢の守護、長野庄司**【劉焉】**は、同国庄野の、賊婦らを討たしめられ、又柳瀬**【劉虞】**といふ女房には、越前の三国なる、幾重**【張拳】**らを討たしめらる。長野庄司は手の者を従へ、庄野をば攻めけるにぞ、賊婦ら残りなく降参す。やがて庄司は倉を開きて、百姓どもを賑はすに、国民拳つてその徳に、**次へ**（6才）／＼**続き**服した



(6ウ・7オ 玄妙ら、柳瀬と対面する)

りけん日ならずして、賊徒らも、皆悉く平らぎたり。柳瀬は手勢を率いて、三国へ向かはんとする所に、津の国兵庫にある所の、水門【劉恢】かたより、玄妙【劉備】に書簡を添えて、云々の故をもて、この女を、助けにし給へとあるものから、柳瀬これを見ると等しく、その喜び常ならず、まづ玄妙を重くもてなし、さて丘竹【丘毅】といふ女を、おのが先手の大将として、三国をさして攻め下り、数日手いたく戦ふに、勝敗さらに分かざりしが、賊の大将幾重が妹に、一重といへる者ありしが、その性荒く猛かりしかば、己に従ふ者どもをば、いさゝかの過ちあれば、みだりにこれを鞭打ちて、傷つくること度々なれば、手下の者どもかねてより、この事を憤りつ、此折から皆心変じて、秘かに一重が寝首をかきて、降人に出でけるにぞ、幾重もことの為体、かなふべきにあらざれば、自ら首をくくりて死す。かゝりければたちどころに、さしも美々しく造りなせし、三国の御所と名付けたる、館も士卒の足に汚され、見るかげもなくなりけり。かくて此よし柳瀬は、東の御殿へ聞こえ上げ、

此度玄妙が功いませしの、拔群なるよしを奏しにければ、御殿おとどにおいても感じおほして、玄妙が先つ頃、よこしま邪平【督郵】を打ちたりし、罪を赦して、重く恩賞を給ひけるに、誰々も皆玄妙が、先にも勲功あるよしを、ことのついでに奏しけるにぞ、すなはち三国の守【平原県令】とせらる。玄妙が喜び大方かたならず、御恵みを受け喜びて、たちまち三国に至りしに、もとよりしてこの所は、米銭まいせんの貯たくはへ多さわにて、馬もの、具も少なからねば、なほいや増しの喜びに、**下へ** **上より** **日ごろの鬱うづごと** **二字不鮮明** 一時いちじに開けて、快きこと限りなし。柳瀬やながせはまた三国をば、討ちおさめたる功により、重き位にのぼされて、勢ひ盛んに見えたりける。

此年卯月の頃よりして、御靈姫おん、御心地例ならず、日々夜々に重らせ給ひ、今は危ふく見えさせ給ふに、いかなればにや大内記、藤の敏行が妻香取【何進】をば、にはかに召し入れ欺きて、殺さんと謀り給ふ。そが故いかにと尋ぬれば、此香取はその昔、極めて賤しき者なりしが、囚らざる幸ひにて、敏行の妻となり、**次へ**（6ウ・

？オ）**続き**一人の男子を儲けたり。その名を敏貴【何貴人】と呼びけるが、此子の生まれ美しく、人となるに従ひて、珠を欺く顔は、「過ぎつる元慶に世を去りたる、在原業平が、幼だちもかくこそ」と、人の皆言ひもてはやすが、いつとなく御殿に聞こえて、御靈姫には見ぬ恋に、深くあこがれ給ひつゝ、「我が身かく父君の、御慈しみを給はりて、おさく天子に劣らざる、身の上となりもてゆき、女御更衣に備へられずは、生涯人に嫁することなし。栄耀は身に余れども、一つの欠けたるは人間の、交はりを知らず死すべし。いと悲しき限りにこそ」と、憂ひ給へる御気色を、十婦人のともがらは、此よしをとく気取りて、秘かに姫上をこしらへつ、「かの敏貴を御寝間の、御伽に備へ申さめ。しかく計らひ給ふべし」と、代はるゝに勧め申すを、御靈姫は言ふがまゝに、従ひ給へば十婦人らは、まづ父の敏行を、禁庭へとりなしありて、大内記になさるれば、母の香取は御殿へ召して、重き官女となし給ひ、しかして後敏貴を、しかくせよとありければ、夫婦辞むによしもなく、仰



(7ウ・8オ 御霊姫、敏貴を寵愛する)

せのまゝに從ひければ、姫上深く喜び給ひ、急ぎ別殿を
 営み給ひ、敏貴をこゝに移し、自らそこに至り給ひて、
 夜の襖を同じうし、借老の契り深かりければ、やがて姫
 上を儲け給ひて、弁姫【劉弁(少帝)】と名付けらる。
 これはこれ、過ぎつることにて誕生の、姫君は今年はや、
 九才にぞなり給ふ。しかるに香取は凶らずも、我がせが
 れのゆゑをもて、夫はさらなりその身まで、重き位に、
 昇りて、何不足なき身となりつ、榮耀には餅の皮、次第
 に權威を振るものから、己が妹に玉苗【何苗】と、
 上よりいふ者のありしかば、これを重く取り上げて、
 いよく権柄盛んなり。
 こゝに又御霊姫は、敏貴年を重ねるに從ひ、顔色や、
 衰へたれば、御寵愛もおろかになり、その後は藤原の
 美容【玉美人】といふ、若者を次へ(7ウ・8オ)／続き
 深く愛して、これも又敏貴に同じく、御寵愛を給はりけ
 れば、また姫君誕生まし、協姫【劉協】とぞ申し
 ける。しかるにかの敏貴は、もの妬みの心深くて、「美
 容が己より、深く姫の寵愛を、受けなば後々我が為に、

（8ウ・9オ 隠家、香取を呼び止める）



○／○悪しからん」と思ふより、美容に毒を飼いて、秘かに殺しけるぞ無慚なる。此ゆゑをもて誕生の、**下へ**／上より協姫は襦袢の内より、時平公の腹心たる、右中弁希世【董董（国舅）】が女房、磐梨の局【董皇后】に、養はれてぞをはしける。御霊姫はかねてより、二人の姫御子の内にして、分けて妹御子協姫を、愛し給ふこと深くして、「後々この御殿に据えて、我に変はらず傳き、女房を数多つけおき、世に敬はせばや」と思せば、かねて近侍の女房らに、その心を得させらるれば、十婦人らの申すやう、「姫上もし弁姫を、そがまゝに置かせられ、協姫を此御殿に、据えんと申し給ふならば、まづ香取をば亡き者に、し給はずはかなふべからず。弁姫はその以前、香取がせがれ敏貴を、**次へ**（8ウ・9オ）／**続き**寵愛ありて儲け給ひし、姫御子にましませば、香取はそのゆゑをもて、権柄を専らにし、よろづ我意をふるまふものから、つひには我が血筋ある、弁姫を此御殿に、据えんと図るは必定なり。今すでに御病、厚うしていと危うし。それにこと寄せ亡き後の、ことを



(9ウ・10オ) 香取、策を議する

遺言し給ふよしにて、香取を御殿へ召し寄し給ひ、兵を伏せ置き香取をば、取り込めて殺させ給へ。しかして協姫を据え給はずは、後必ず禍あらん」と言ふに、御霊姫は十婦人の、申すに従ひ香取をば、御使ひをもて召し寄し給ふに、香取は何の心もつかず、召しに應じて出でけるに、館の門を入る折しも、隠家【潘隠】といふ女子が、慌てし色にて走り来つ、香取に秘かに囁きて、「かやうくの訳あれば、館の内へ入り給ふな」と、告ぐるに香取は大きに驚き、門前より引き返し、いそしくおのが屋敷に戻り、にはかに諸々の女官を、我が方へ招き寄せ、「かやうくのゆゑをもて、十婦人らを罪せん」と、相談に及べる時、はるか末坐に控へたる、年いと若く顔よき女が、振りの袂の打掛の、襖かい取りて進み出で、「妾つらく考ふるに、十婦人のともがらの、勢ひを得たること、昨日今日のことならず。そもく左の大臣時平の君、今の東の御殿をば、営み給ひて御霊姫を、据えまします頃ほひより、傍ら近く召し使はる、女子どものことなれば、自づから権柄ありて、今に至りてます

くはびこり、勢ひ当たるべうはあらず。にはかに彼ら
 を悉く、滅ぼし尽さんとし給ひて、計はかりごとをし損じなば、
 却つて禍わざはひを引き出だす、端にしてこと軽からず。よく
 く御思慮を左へ／＼右よりめぐらし給へ」と、言葉忙
 しく言ひ出づるを、諸々の女官らは、誰人なるやとよく見
 れば、将門の妹滝夜刃姫【曹掾】なり。香取は見やりて
 うち笑ひ、「おこと小女郎の分際にて、いかでかこの大
 事知らん。烏滸がましきよ」とやり込む、◇／◇遣
 り戸引き開けつと入るは、かの隠家にて慌てて言ふやう、

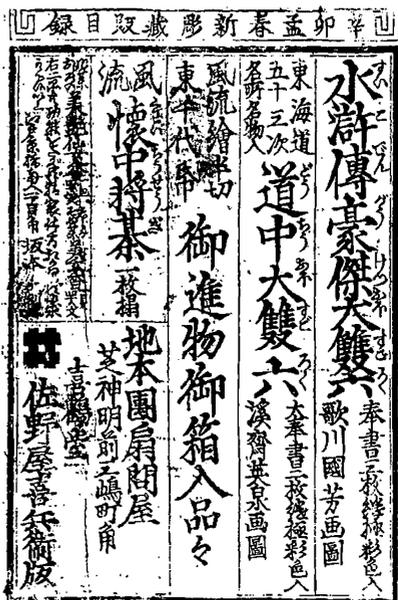


(10ウ 初糸、戦支度する)

「御霊姫つひにして、たゞ今逝去し給ひぬ。十婦人らこ
 の事を、深く隠して人に知らせず、早く香取を召し寄せ
 て、伏兵をもてこれを殺し、のちの禍を除きつゝ、しか
 して協姫を御殿に据えんと、その設けの最中ぞや。必ず
 使ひの人来たらん」と、いまだ言ひも終はらぬに、
 (9ウ・10オ)／＼続き館よりの走り使ひ来りて、「御霊
 姫の御病、次第々々に重らせ給ひ、いと危ふくましませ
 ば、早く香取を召し寄せて、のちの事を委ねまします、
 御心にてをはすよし、早く館へ参らるべし」と、言ひ捨
 ててたち帰るに、滝夜刃姫再び言ふやう、「今日のはか
 りことは、まづ姫御子たちいづれをか、据えん据えざら
 んの旨を定めし、そが上にて十人の、賊婦らをうち給へ
 かし」と、言へば香取は笑ましげに、傍らを返り見つゝ、
 「誰そ我が為にこのことを、よく図らん者はなきや」と、
 言ふにまた一人の女、席を進むを誰そと見れば、姿かた
 ちは優しくて、よろづの武芸を嗜みつゝ、丈夫にも劣ら
 ずと、いはるゝ程の名題者、名を初糸【袁紹】と呼びな
 して、人に知られし□／＼女なり。その時初糸香取に向

かひ、「願ふは妾こと慣れたる、女兵を数多預からは、
 弁 姫を館に据え、東の御殿と敬はせ、なほ悉く十婦人
 の、ともがらを罪せんこと、妾請け合ひ申さんまゝ、任
 さし給へ」と懇ろに、乞ふを香取は喜びて、「さらばよ
 しなに計らひ給へ。手の者数多三の巻へ」
 (10ウ)

《第一冊 後表紙封面》



▼「辛卯孟春新彫蔵販目録」。前年のものとはほぼ同内容
 で、冒頭に国芳画『水滸伝豪傑双六』を掲げる。本
 誌第五〇四号二三頁参照。

《第二冊 表紙》



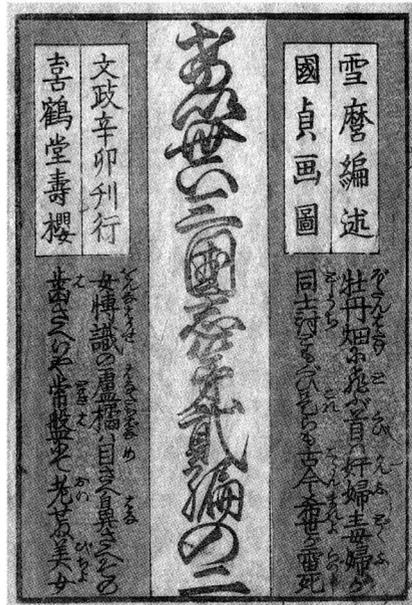
辛卯新刊

呂布【▼駒絵内。中央は調布】

傾城三国志二編 上帙巻下

雪麿著 国貞画 喜鶴堂梓

《第二冊 前表紙見返し》



雪麿編述

国貞画圖

けいせい三国志第式編の二

文政辛卯刊行

喜鶴堂寿桜

牡丹畑に飛ぶ首は 奸婦毒婦が

同士討ともぐひ 是れも古今希世が雷死

女博識の盧橘は

目さへ鼻さへその

歯さへ いや常盤にて老せぬ美女

(三)

「二の巻より預くるぞ」と、聞くより早く初糸は、糸毛の
 鏡よろひ 肩にうちかけ、大かたに身を固め、三百余人の手勢
 をば、促したててうち従へ、すぐさま館に押し寄せつ、
 めぐりを囲んで諸人の、通ひをかたく〇／＼止めたり。

香取は此時、三十人に余りたる、官女らを伴ひて、初
 糸に、続きて館に至りつ、御霊姫の靈前にて、今改め
 て弁わかまひめ 姫を、此館に据え奉れば、「今日よりして此姫を、



(11才 石橋、奮戦する)

東の御殿と仰ぐべし」と、下知を下せば誰ありて、否む
 者なく頭を下げ、皆万歳を唱へける。初糸はとりあへず、
 兵に下知を伝へ、十婦人らを捕らへさするに、中にも
 石橋【蹇碩】これを見て、「とてもかくても逃れがたき
 所よ」と覚悟を極め、自ら刃をうち振り、兵共を防
 ぎつ、四方八面斬りめぐるを、初糸様子をうち見やり、
 「小賢しき働きよ。さはさせじ」とこれも又、次へ(11
 才)／＼続き刃をまはして打つてかゝる、勢ひ当たるべう
 もあらぬに、その威に恐れて石橋は、庭へ飛び下りこゝ
 かしこ、あなたこなたへ駆け巡り、身を逃れんと逃げ回
 りしが、折節御園は牡丹の花、今を盛りと咲き乱れ、爛
 漫たる花壇の中へ、身を隠さんと逃げ入る石橋、「さは
 させじ」と追つ駆くるは、十婦人の一人なりける、毛衣
 【郭勝】といふ女なり。やがて石橋と渡り合ひ、しばし
 が程は斬り合ひしが、毛衣苛つて打ち込む一刀、石橋は
 受け損じ、肩先四五寸斬らせつ、怯むところを毛衣が、
 再び打ち込む刃の下、水もたまらず石橋が、首はあなた

（11ウ・12オ 毛衣、石橋を斬る）



へ飛んだりける。毛衣その首拾ひ上げて、片手にこれを差し上げつゝ、はるかあなたに控へたる、香取が方へ示しけり。

此ていを見て初糸は、香取がそばにさし寄りて、**下へ** / **上より**「かく館の内騒動なし、かのともがらすら同士撃ちして、乱れたることいふかたもなし。此ついでをもて十婦人を、一人も残さず殺し尽して、後の害を除き給へ。しからざれば彼ら皆、党を結んで禍を、引出だすことあまたならん。此期を抜かし給ふな」と、諫むる言葉を聞つけて、事急なれば、十婦人のともがらは、慌てうるたへ敏貴が、別殿へ走り入り、声を放ちて悲しみ嘆き、「かやうくの訳をもて、御母香取の局さま、我々を殺さんと、なし給ふこといと急なり。もとより謀を設けつゝ、香取さまを殺さんとせしは、石橋一人がわざにして、我々が預かる所ならず。さるを香取の局さまには、賢しらを構ふる者の、言葉を受け入れ給ひつゝ、我々を悉く、殺さんとし給ひぬ。君願はくは憐れみて、助け給へ」と嘆くにぞ、敏貴そのよしうち聞て、「御身らいた



(12ウ・13オ 香取、敏貴に説き伏せられる)

く次へ(11ウ・12オ)／続き憂ひなせそ。われ此ことは
 請け合ふて、必ず御身みんらを救ふべし」とて、使ひをもつ
 て母の香取を、我が別殿に招き入れ、やがて香取にうち
 向かひ、「御身も我が身も先ごろは、貧しく賤しかりし
 身の、今かく榮華の身となりしも、またくかの十婦人ら
 が、姫上に勧め申して、幸ひを給ふが故にて、みな十婦
 人らがなせるところと、いへばいはるゝ道理ならずや。
 又御身をば殺さんと、図りしは石橋一人が、なせるわざ
 にて今彼は、すでに御身に誅せらる。かゝればその身の
 仇を除き、他に疑ふ所はあらず。他し人の賢しらを、ま
 ことと思し受け入れて、十婦人らを殺さんと、し給ふは
 何ごとぞや。必ず千載せんざいの後までも、笑ひを残さんとし給
 ふか。いと鳥濟とこなり」と諫むれば、げにもつともや聞
 受けけん、ひと言さへに返しもやらず、香取は笑ひ領きて、
 いとま申してまかでたる、親ながら子は姫上の、恵みに
 次へ(12ウ・13オ)／続きのぼる位くら山、仰ぎ敬ふばかり
 なり。香取はもとの館に戻り、数多の官女らに言ひけ
 るは、「十婦人のその内にて、石橋一人我を謀りて、殺

さんとしたりしものから、毛衣の為に撃たれぬ。その余の婦人にもとより罪なし。一人も殺すことなかれ」と、言へば初糸驚きて、「そはおん言葉とも覚え侍らず。かの者共を生け置くは、世の為に禍を、引出だすの根本なり。此ついでをもて草を刈り、根を除き去らざる時は、後に大きに害を生ぜん。早くかれらを殺し給へ」と、再び香取を諫むれば、香取は怒れる面色にて、「我が身はや胸を定めて、殺さじとこそ思ひぬるに、そを再び諫むる者、此後あらばその人から、先に自らが殺しなん」と、言ひつゝ館を立出でぬ。

その明くる朝敏貴は、服を改め館に出仕し、ほしいまゝに己が母、香取をして位を重うし、その他の官女らにも、「此度弁 姫を館に据えし、祝志也」とて各に、かづけ物を与へつゝ、おのがまゝをふるまひしかば、此ことを漏れ聞て、磐梨も己が方に、十婦人らを秘かに招き、「我が身先に香取がせがれ、敏貴が御霊姫の、御寵愛をかうぶ、被る頃、よきに取りなし遣はしぬ。今かれが子の弁 姫、御殿に座り勢ひありて、女房らは悉く、皆かれに心を寄

せ、勢ひはなはだ盛んなり。我が身協姫を養ふて、子となし置くことすでに久し。御霊姫の御心も、常に協姫を館に据ゆる、思し召しで **右へ** **左より** ありけるを、弁 姫と交はりしからは、旨にも違ひその上に、妾が本意にあらずかし。いかゞはせん」と問ひければ、中に讓葉【張讓】座を進み、「今此東の御殿にて、勢ひを振るはん者、御身ならでまた誰そあらん。御身自ら館に出でて、よろづの事を指図し給ひ、連れ合ひ希世公【董重】をも、その事に与らしめ、また我々を重く用ひ給ふ時は、権柄いよく盛んになりて、香取らが威勢をば、奪ふこと易かりなん」と、言ふに磐梨頷きて、その旨に従ひつゝ、夫希世を館に致して、十婦人らをととり用ひ、協姫を御殿に据えて、よろづ己が指図にて、香取らある甲斐なしに、扱ひければ自づから、権柄はこなたに帰して、すこぶる勢ひ盛んなり。

敏貴は此事を、安からず思ひければ、ある日酒宴を設けつゝ、己が方へ磐梨を招き、様々にもてなして、酒たけなはに及べる頃、自ら杯を、磐梨に勧めて言ふやう、



(13ウ・14オ 磐梨夫婦 権柄を握る)

「ことあたらしく候へども、御身が連れ合ひ希世公、この頭館へ出仕ありて、よろづを裁断し給ふよし。時平公の仰せにより、男たる者は禁じられたり。ことに御身もその職に、あらずしてその事に、与り給ふはいかにぞや。此のち御殿の事においては、よくも悪しくも関はらず、その役々に任せおかれば、自づから穏やかならんと、思ふはいかに」と問ひかくれば、磐梨面を赤うして、怒れるさまにて答ふるやう、「よくも言へば言はるゝものよ。此ごろ御身の母香取、傍らに人なき如く、振る舞ひしを忘れしか」と、言へば敏貴嘲り笑ひて、「そは事を弁へぬ、愚かなる言葉なり。次へ(13ウ・14オ)／＼続き御身夫婦はいぬる頃、時平公にあげ用ひられて、内裏においては勢ひあれども、東の御殿にとるときは、掛けつ構ひもなき身にて、たゞ協姫を養ふのみ。我が母香取は、時平公の命を受けて、東の御殿の官女にて、よろづに与らずといふことなし。こゝをもつて御霊姫、るまさずなりしそのゝちも、以前に変はらず館の事は、よろづ指図を伝ふるが、悪しきと宣ふ事なるか。これ時平公の命にして、



（14ウ・15オ 馨梨、敏貴と口論する）

その言ひ付けを守るなり、我が私わたくしのことならず」と、言はれて馨梨返すべき、言葉なければせん方かたなく、「汝御霊姫の寵に誇り、色を貪るところより、美容よしかたを毒殺なし、己が子の弁おのれ姫を、遂に御殿おとに据えたるならん。これみな香取がわざにして、威を専らにするゆゑなり。此のちおとが頤 動かさば、我が夫希世つまに告げ聞こえ、親子が命にとまを取らし、地獄巡りをさするなり」と、言へば敏貴肘を張り、威丈高にて罵りけるは、「こなたは言葉を柔らかにし、理を立てて言ひ聞かするに、いかなれば無礼なる、雑言過言ざごんくわごんを吐き出だせる。その義ならば武士に命じて、直ちに頭かうべを刎ねんす」と、息巻き荒く罵れば、馨梨はなほ怵こへかね、「汝はもとより大内記、敏行が子なれども、母の香取はその昔、賤しき者の娘にて、猪ぶし、鹿など切り売りして、世を渡りたる家に生まれ、何の知恵才覚ありて、今人がましく口をばきくぞ。烏澁がましや」と罵れば、敏貴もまつ赤にせき上げ、今はかうよと見えければ、馨梨に従ひ来たれる、讓葉はうろたへて、中に分け入り双方を、様々に言ひなだめ、馨梨を伴ひて、

急ぎ館に帰りける。

敏貴はそのゆふべ、○／○母の香取を我が居間へ、招きてことの子細を語り、「いかやうにも此ことを、よしなに計らせ給へ」と言ふ。香取も己が思案に能はず、数多の官女を招き寄せ、「いかゞ計らん」と相談するに、みな口を揃えて言ふやう、「盤梨を▲／▲東の御殿へ、出で入りさせてはこと難し。早く彼をば遠く退け、必ず御殿の出入りを止めば、穏やかなること必定なり」と、言ふに香取はその意に任せ、無体に盤梨を遠く移し、館

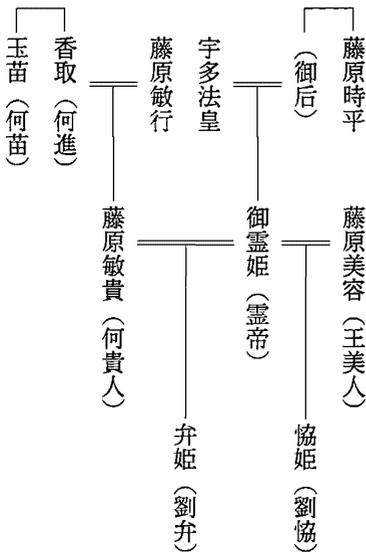


(15ウ 希世、雷死する)

の出入りを止めなければ、次へ(14ウ・15オ)／続き希世が憤ること甚だしく、手勢数多を引率なし、敏貴・敏行親子を囲み、攻め殺したるその後に、東の御殿へ押し寄せて、香取をもまた殺さんと、囂るよし●／●聞こえければ、香取にはかに女兵を催し、こなたより逆寄せして、希世が家をおつ取り囲み、揉みに揉んで攻めたりき。この日にはかに大雨降り、雷しきりに鳴りはためきて、敵も味方も刃を交へず。四の巻へ(15ウ)

《東の御殿系図》

※()内は原作の相当する人物



(四)

三の巻よりひとかたまりに戦き恐れて、しばらく時を移せる内に、希世は雷に撃たれつゝ、居間の小座敷に死したりけるとぞ。これすなはち、菅丞相道真公の、怨霊の所為なりと、言はざる者ななかりける。

▼平希世は、延長八年（九三〇）六月、清涼殿で雷死。彼が道真配流に関与したとするのは俗説で、

馬琴『昔語質屋庫』（文化七年、文金堂等刊）巻

四にも、「されば左大弁希世のごとき、菅家左遷



(16才) 香取、磐梨一家を滅ぼす

の事などに、かゝつらひたる人にはあらねど、まはりあはせのよからずして、震死れ給ひしかば、倭人の部へ入られて、世に悪名を誣はるれど」（二十三丁裏）とある。

か、れば香取は手勢をまとめ、此所を退きける。

十婦人はおのれらが、謀の上へ下りかなはざるを見るものから、また思慮をめぐらして、香取が妹玉苗に、金銀数多を秘かに送り、また夫敏行にも、賂をなしておきて、香取に用ひられんことを、言葉たくみに頼みければ、かれら二人がとりなしにて、その身くは無事を得て、心秘かに喜びける。

かくて後、香取は秘かに、磐梨を毒殺なし、知らぬ顔にてうち過ぎけるが、ある時初糸香取に言ふやう、「十婦人のともがらが、この頃秘かに噂するは、御身が磐梨を殺し給ふは、次へ（16才）東の御殿を奪ひ取り、己が姫に代はらんと、なし給ふ兆し△/△なりと、沙汰することしきりなり。この時に乗り十婦人を、一人も残さず殺さずは、後に禍起こらん」と、また懲りずまに幾度



(16ウ・17オ 玉苗、敏貴を説得する)

か、諫むるを聞手^{きこ}を打ちて、香取もこれに答へて言ふやう、「おことが諫めさることなり。我が身もしかぞ思ふなれ。日を定めて十婦人を、早く討ち平らげん」と、秘かに二人の物語を、はやとく聞^きて十婦人らは、また玉苗に賭^かして、よくそのことを頼みければ、玉苗ある日敏貴の、もとに至りて物語るは、「妾が姉香取の局、弁^{わきま}姫を館に据え、姫の助けとなりながら、仁慈^{かんじ}を思はで専らに、人を殺すを宗として、またもや十婦人らを殺さんと、下へ上より謀り給ふよしなりき。今やうやく穩やかなるに、またく乱を招くの端なり。早く諫め給へ」と言ふに、敏貴は香取を招き、「十婦人らの権柄あるは、これ自然の道理にて、常に君の傍らに、侍る者みなしかり。御靈姫世を去り給ふ、御身かれらを悉く、殺し尽さんと謀らるゝは、かへつて御殿を重んずる、道理に違^{たが}ひていと危うし。必ず思ひ止^{とど}まり給へ」と、言はれてもとより思慮薄く、決断少なき香取の局、とかうの応^{こた}へもなしかねて、その座を立ちて退きつ、己^{おのれ}が宅に帰り来たるに、初糸は出で迎へ、「かの事はいかになりしぞ。聞かまは



ナハの三巻の二編
 (17ウ・18オ) 香取、滝夜叉らの諺めを聞かず

しき」と問ひかくるに、「いやとよかれらを殺さんこと、敏貴かつて聞入れず。さるがゆゑに妾もまた、何の応へもせずして帰りぬ」。初糸、「しからば御身の自ら、手を下し給ふことをやめ給ひて、他人の手を借り殺さし給へ」。香取頷き喜びて、「いかにもそのことよかんめれ。わが子ながらも敏貴が、思ふところも憚りあれば、御身が言葉に従はん」と、言へば堰【陳琳】といふ女、傍らにありけるが、座を進みて言ひけるは、「この事甚だよろしからじ。御身御殿の威を借りて、権柄を握りてをばせば、何ごとも心のまゝなり。十婦人らを殺さんこと、盛りなる火をもつて、**次へ**(16ウ・17オ)／＼**続き**毛を焼くよりもいと易かり。早く事を決断して、自らかれらを討ち給はゞ、天人ともに従ふて、誅に伏さんこと必定なり。もし他人の手を借りて、討ち給はんとて諸人を、内裏に等しき、□／＼御殿の内へ入れ給はゞ、誰々もその挙に乗りて、乱を起さんと謀るべし。これ全く禍を、引き出だす端なるべし。逆しまに鉾を取つて、人に授くるに柄をもつてすといふ、ことわざには違はずして、こと

必ず破るべし」と、諫むる言葉を聞入れず、香取は嘲り笑ひつゝ、「言葉理あるに似たれども、下世話にいふなる取り越し接じ、余りに狭き料簡なり。御身無用の舌を動かし、口に風邪をな○／＼引かせそ」と、言ふ傍らに滝夜刃姫、手を鳴らしうち笑ひ、「あゝ無用なる長詮議よの。かの十婦人らを殺さんこと、石をもて玉子を庄すに、等しくていと易し。君に咫尺し奉り、近く仰せをうけ給はる者、古今皆權威ありて■／＼その禍大いなり。今もしその罪を、糺し給はんとならば、悪人の張本を、取り除くにしくことなし。何とて他人の手を借りんや。万一他人の手を借りなば、こと必ず破るべし」と、言ふに香取は大きに怒り、「しからば御身もその心を、腹に蓄へあるやらん」と、言へば滝夜刃不興顔にて、外面に出でて吐息をつき、「近きに乱を起こさん者、必ず香取の刀自なりけり」と、悲しみ嘆くばかりなり。

香取は人の諫めも聞かず、やがて次へ(17ウ・18オ)

／＼**【続き】**使ひを遣はして、「かやう／＼の次第なれば、十婦人のともがらを、誅せんと思ふ也。共に力を添え給

へ」とて、まづ紀貫之が棲橋立**【橋瑠】**、ならびに大内記紀の友則が娘篠原**【丁原】**、甲斐掾凡河内躬恒が妻**【王匡】**、右衛門の府生壬生忠岑の娘遠郷、かつ又先に黄巾の、賊婦らを討ちし時、戦ひ負けて玄妙に、救はれたる右京亮、三好清行が女房董根**【董卓】**、これらを味方にかり催さんと、その用意大方ならず。

此董根の局といへるは、丈高く肥え太りて、腰のめぐりの太きこと、たとへのふしの立て白に、薦をまきばの董根が、濁りに染まぬそれならで、濁る心は濁る世に、意地くね悪くはびこりて、**【上へ】**下より黄巾の賊婦を討ちし時、さまでの功もなかりしが、十婦人らに略して、功あり顔にとりなされ、世の口の端を逃れしが、底意は東の御殿をば、己が物になさんといふ、たくみの程ぞ恐ろしき。かゝる下心のありけるに、幸ひ香取が使ひにあつかり、天の助けとうち喜び、「香取が方へ力を添ゆるは、もとより願ふところぞ」と、返事して遣はしければ、香取も喜ぶるたりしに、小ざらし**【鄭泰】**といふ女、**【盧植】**もろ共に、香取がかたへにありけるが、「香



（18ウ・19オ 董根、香取の使者と対面）

取の刀自にはいまだかの、董根が為人は、如何なる者と
も知り給はずや。董根が胸悪しきこと、虎狼より恐ろし。
もし今御殿の内に入れなば、必ず人を喰らふべし」と、
言へばその緒にとりつきて、盧橘も又言ふやう、「董根
が底意の程は、**中へ**／＼**上より**妾もよく知りてあり。表に
善を見するといへども、底意に悪を蓄へて、不仁なる行
ひあり。御殿の内へ引入れなば、よからぬことを引き出
ださん。此憂ひを止めんと思さば、早く使ひを遣り給ひ
て、董根が、力を借りぬにしかじ。さはなきか」とて盧
橘は、小ざらしに目をくはすれば、等しく小ざらしも口
を揃へて、共に諫むる言葉も聞かず、香取は二人を叱り
つけ、「御身ら常に御殿に仕へて、君の禄を食みながら、
志なき人々よ。みだりに**次へ**（18ウ・19オ）／＼**続きもの**
を言はんとして、人の心を迷はすは、いと烏濟なるわざな
りかし」と、聞入れぬべき気色ならねば、二人は香取が
従はざる、様子を見つ、嘆き悲しみ、「必ず近きに都の
内、乱れんこと目の当たりなり。この所にうかくゝゐて、
禍にあはんより、互ひに身の難を逃れて、閑居せんこそ



(19ウ・20オ 讓葉、敏貴に救いを求める)

よからめ」と、二人は御殿を忍び出で、遠く走ればこれを見て、我も〜と密やかに、逃れ出づる者半ばに及べり。香取はなほも心に悟らで、董根らが来たるをば、いまや遅しと待ちてをり。

(19ウ、坂本氏広告)

○世間に類なき御顔の薬白粉 美艷仙女香 四十八文
 同じく黒油 美玄香 一貝 四十八文
 江戸京橋南へ巷丁目東側角 坂本氏製

さる程に十婦人らは、この由を漏れ聞て、中にも讓葉が言ひけるは、「この程もの騒がしきは、定めて香取が計らひにて、わなみらを討たんためならん。我々早く手を下さずは、族までも滅ぼさるべし。その手当てこそ肝要ぞ」と、屈強の手の者、五十人を選びて、館の門内に伏せおき、己らはうち揃ふて、敏貴に見えつゝ、悲しみ嘆きて言ひけるは、「此ほど人の噂を聞くに、香取の局御殿よりの、仰せなりと宣ひて、諸人の妻女を語らひ、我々が族までを、滅ぼさんとし給ひぬ。願はくは憐れみを、垂れ給ひて我々を、救ひ給へ」と頭をもて、畳を叩

きて声をあげ、涙を流して悲しめば、敏貴はこの様子を見やり、「御身みづから自ら香取の局が、下へ／上よりもとに至りて直々ぢぢくに、此事を嘆くならば、目の当たりに悲しみの、様子を見られれば憐れみの、心起こりて、許し給はんは必定なり」と、言ふに讓葉頭かうべをうち振り、「いやとよわなみ直々に、局がもとに至りなば、粉微塵にせらるべし。願ふは君の勢ひをもて、このところへ香取の局を、召し寄し給ひて我々が、命乞ひして助けてたべ。もしもこの事かなはずは、この上は力なし。御座敷おんざを穢けがさん」と、



(20ウ) 香取 東の御殿へ向かう

争ふて已まざれば、せん方かたなくて敏貴は、母の香取を事にかこつけ、「急おのぎ己が住まひへ来たり給へ」と、呼びにこそは遣はしけり。次へ (19ウ・20オ)

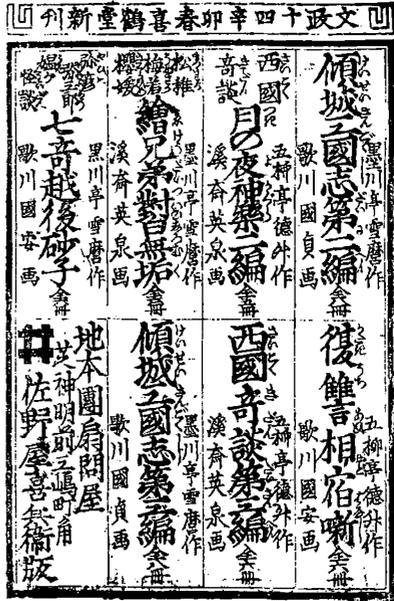
続き香取は使ひの来たれるまゝ、何心なく行かんとして、供の用意もそこくくに、行かんとするを堰いせきが下へ／上より止めて、「御身必ず早まり給ふな。此使ひこそはまことゝしがたし。必ず十婦人のはかりごとにて、釣りつけんとこそするならめ。病やまひにかこつけしばらくは、行かでもあらんものと思ふに、軽々かろくしくなし給ひそ」と、再び諫めて已まざるは、星を指したることくなり。五の巻へ

香蝶楼国貞画

墨川亭雪麿作

(20ウ)

《第二冊 後表紙封面》



▼奥目録 「文政十四辛卯春喜鶴堂新刊」。右上に本作
 第二編、左下に第三編が掲出されている。この年
 (前年十二月に改元されたので、天保二年) 実際に
 刊行されたのは、第二編のみ。

(かんだ・まさゆき 法学部准教授)